

---

# 御華詩Garden

nakoso

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

御華詩 Garden

### 【Nコード】

N1129D

### 【作者名】

nakoso

### 【あらすじ】

手の平サイズの物語を掲載いたします。お時間のございます時にご賞味いただければ幸いです。まずは味見から、いかがですか？

## あたしの門出

同棲歴１年と半年。

その果てが破局。

決して広いとは感じなかったマンションの部屋は、彼が出てっただけで広さを取り戻した。

さて。今日は日曜日。

はげて脂ぎった上司の一挙一動にキレかける心配もない。

んー。部屋の整理でもしようか。

くそつたれな男が残してった要らない物を、一思いに捨ててしまおう。

もともとは私が集めていた小説を収めるためだった本棚。文庫本ばかり集めてた私とは対照的に彼はハードカバーばかり集めてた。値は張るわ微妙に厚いわで私は文句ばかり言ったもんだけど、いつしか半分以上が彼の本で埋まってた。

こうして改めて眺めてみて、彼の乱読っぷりに呆れる。文学小説と推理小説とホラー小説を「頭痛促進剤」と一言で一蹴する彼は恋愛小説を好んだ。作家を選ばず、恋愛がテーマであれば良かったらしい。

物語を読み終わると主人公たちに気が済むまで罵倒を浴びせ、そくさと次の本を手取る。

恋愛学者にでもなったつもりなのか。

物語の主人公たちが実際に彼と話したら心中しかねないような事を大いに語ってた。

そんな彼がうわべだけの恋愛上手なのは、私はよく知ってる。

売ればそこそこの金額になりそうだったけど、くそつたれな男の本を売ってくそつたれな金を使う私もまたくそつたれになってしまっいそうで、捨てる事にした。

これだけの本を残して出てったくせに、CDだけは全部持ってっ

た。おかげでCDラックはスカスカ、ずいぶんと風通しが良くなったもんだ。

こうなるんだったら、気に入ってたCDを片っ端からMDに落としておくんだたと、今さらながらに悔やむ。

はたと思い出して洗面所に向かう。案の定、シェイビングクリームとコップの中突っ込まれた2本の歯ブラシが残ってた。まだ半分以上残ってたシェイビングクリームをゴミ箱に放り、彼用の歯ブラシをへし折った。

ぼきり。

洗面所の鏡に映る私は、とても人様に顔を見せられそうにないほど顔色が悪かった。眠そうにクマを引っ下げた半目に、寝グセで爆発してる頭。

跳ね上がった毛先をつまみながら、そろそろ美容院に行こっかな、などと思う。

顔を洗ってリビングに戻ると、床に転がったアルバムを見つけた。座って、膝の上に乗せてみる。

何の飾り気もない質素なアルバム。

付き合っすぐの頃に買ってくれたアルバム。

思い出を作ってこう。

などとのたまった彼は、しかし写真が好きじゃなかった。

めくってみればわかる。入ってる写真は3枚だけ。

このマンションに引っ越した直後、荷物の整理にせっせと精を出してたところを撮られた不意打ちの1枚。

その仕返しで撮った彼の寝顔。

さらにその仕返しで撮られた私の寝顔。

何やってんだか。

こいつも捨ててやろうかと考えて、やっぱりやめた。

やな事があつたからって、楽しかった思い出に罪はない。

嫌気が差しても、残しておきたい写真がある。

なんちゃって。

たしか、彼が思い付きで私に買わせたボラロイドカメラがまだ残ってたはず。そいつでこれからの思い出を作ってこう。

真剣になったり、笑ったり。

騒いでみたり。

泣いたり悩んだりする時も。

そのためにもまず、掃除してしがらみもまとめて捨てたこの部屋を撮ろう。

決心して、私は腰を上げた。

、

足元でケータイが鳴る。私は反射的に取った。

彼からだった。

いわく、

頭を冷やしてみた。

ケンカして、出てったのは馬鹿だったと。

ひいては、

またやり直さないかと。

笑い出しそうになるのを必死にこらえて、私は言った。

「さようなら」



## あたしの門出（後書き）

門出。様々な門出があるとは思いますが、今回はこんな「門出」をお送り致しました。

作者自身は、こういった女の人が好きだったりします。

## ウソgame

青　　黄　　赤。

信号の指示でブレーキを踏みつけた。

この交差点の赤は長い。

サイドブレーキを上げて鼻先で横切る車と歩行者を、ワイパーの向こうに眺める。

カラフルなカサ模様。

窓を伝う雨雲を目で追っていると、助手席から声をかけられた。

「ウソゲームしようよ」

「はい？」

快活に笑う彼女に眉をひそめた。

「ここの信号、青になるまで長いでしょ？」

こいつとは、付き合い始めて今日でちょうど5カ月。

「それまでの暇つぶし」

「どんなゲーム？」

沈黙が続くよりはマシ。俺は承諾した。

「思ってることの逆を言うの」

うれしそうに簡単な説明。

どういう発想力を持っているのか、時々彼女の頭の中を覗きたくなる。

「じゃ、スタート！」

何を言おうか考える間もなく、彼女の先制。



「私、雨が大好きなの。水たまりに飛び込みたくなる」

雨は嫌い。水たまりも嫌い。

「俺は晴れてる方が好きだな」

俺は雨が好き。

「そうなの？ 知らなかった」

それを彼女は知っている。

「言っていないからね」

前に話したから。

「じめつとした空気の方がいいよ」

「からつと晴れた日の方が気持ちよくない？」

ウソの反論に彼女はご満悦。

何が楽しいのか、俺にはわからないけど。

「えへ」

うれしそうに笑う彼女は楽しそう。

「あとね、あとね」

きよろきよろと頭を揺らした彼女が、後部シートに上半身を伸ばした。

何事かと思えば。

「これ」

その手に取ったのは1枚のCDケース。

メガネが3つ、公園のベンチに並んだジャケットで俺が好きなCD。

目の前に出されたそれに相槌を打つと、

「これ、大っ嫌い」

たとえウソゲームと言っても、笑顔での否定ってのはつらいものだ実感した。

「センスないもんなー」

言っていて苦笑にしかない。

「あ」

小さい口を彼女が開いた。

歩行者用の信号が点滅している。

「じゃーねー」

まだ続けるつもりらしい。

サイドブレーキを下げつつ、俺は青信号を心から待ち望んだ。

自慢の笑顔で彼女は言う。

「あなたが一番好き」

彼女に横目で俺は笑う。

「この世で一番愛してる」

信号が青に変わった。

## ウソgame（後書き）

とあるマンガを読んでいた時の事。

もしも自分だったらどういう風にするのかな？と想像（妄想）を膨らませたら、こういった形に相成りました。

いわゆるインスパイア物とでも呼びましようか。

## スナオ/Monthly/スガオ

いつだつて寝覚めがいいのが自慢。

日曜日の a.m. 9:00 鳴る寸前に目覚まし時計を止めた。  
しゃかつ！ とカーテン開けて取り込む午前の陽射し。ベッドで  
うめいて寝返り打った、その背を揺らす。

キミは不機嫌に鼻を鳴らして、背中を丸めた。

あと5分……

抱えた掛け布団に埋めた、くぐもる声。

八つ当たり気味に背中を叩いても反応なし。

あきらめてキッチンへ。

フライパンを左手に、右手には卵を2つ。

かつかつとコン口の火を付けて、熱したフライパンに油を敷く。  
左右の手でそれぞれ割った卵は、フライパンに落ちるなり寄り添っ  
た。

じゅわわわわ。

弱火にしてフタを閉じる。

冷蔵庫から取り出した牛乳をコップに注いで一気飲み。

ぷはーっ。

牛乳を戻したところでベーコンとご対面。

おはよう。いるなら言えよ。ベーコンエッグにしてやったのに。

冷蔵庫に放置して、フライパンのフタを開けばいい塩梅。水を注  
いだら、じゅわわじゅわわ。湯気ごとフタで閉じ込めた。

さて。ここで取り出しますはヤマ キの6枚スライスパン。残り  
2枚なり。

にやり。

黄身が白くなった目玉焼きを挟んで、いただきます。

3口目で黄身が潰れて。

4口目で指先の黄身を舐め取って。

6口目でキミが起きた。

膨張した頭を掻きながら、ギリギリ開いたまぶたで見たのはパン袋。ついさつきから燃えないゴミ。

そんな目で見たって知らないよ。起きないキミが悪いんだ。

ふてくされたキミはテレビを付けて社会情勢を見つめるけど、大してキョーミがないって、アクビが即証明。

満腹感をみぞおちに見付けて、残ったパンをキミにお届け。

「食べる？」

つまんだパンにかぶり付いたキミは犬に似てる。

気紛れで寝癖の似合う、飼い慣らすには少しばかり手に余る犬。

キミの頬についた黄身をキスで拭った。

「朝イチバン、モーニングクーズ！」

「ねむ……」

「今日は何の日でしょう？」

「ねむ……」

「何の日でしょー？」

「ねむ……いたいいたい」

頬を引っ張って横に伸びる顔。

今日は2月、第3日曜日。

寝惚けたまんまキミが言う。

「1年記念日？」

「それは先週」

「同棲半年記念日？」

「それも先週。しかも同じ日」

「んー？」

「忘れた？」

「忘れてないッス」

キミは壁にかかったカレンダーを指差すと、またアクビした。アートだとか言ってキミの買ったカレンダー。アートが何なのかなん

てわからないけど、今日の日付に入ってる赤い星はわかる。

「準備すつかあ」

大口開けて背伸びするキミに頷いた。

半分眠ったまんまのキミと並んで歯を磨く。

青いハブラシと白いハブラシ。

しゃこしゃこ。しゃくしゃく。

2つの顔が映る鏡がスキ。

キミがいつも、めいっばい歯磨き粉を使ってくれるおかげで、チューブの残りを気にするようになった。

チューブの絞り方が上手くなったよ。

キミがトイレに入ってる間に着替える。ジーンズとパーカー。一緒に暮らし始めて半年経つけど、着替えてるところを見られるのは恥ずかしいから。

パンツ一丁でウロウロするキミは笑うけどね。

顔を洗ってから、キミとトイレ交代。

「ちよっと待った」

キミが差し出したトイレットペーパーを受け取って、いざ引きこもり。

なるほど。確かに半分しかない。

でもそんなに使わないってば。

活躍を次回に見送られたトイレットペーパーが不憫に思えて、こもってる間ずっと持つといてあげた。

トイレから出たら、鏡の前で首を傾げてるキミがいた。

「どうしたの？」

「ヒゲって剃るべき？」

「いいんじゃない？」

「……それってどっち？ 剃っていいの？ 剃らなくていいの？」

「剃らなくてもいいんじゃない？」

「了解」

そういつて着替え始めたキミは、ひよっとしてずっと考えあぐね

てた？

呆れた。

ジーンズにウィンドブレーカーを羽織ったキミと戸締りを確認して、外に出る。

あっぱれ快晴、青い空。

どこまでも抜けて広い蒼。

手をつないで歩く道はぽつかぽか。  
遠回りして、公園に寄ってみよう。

あ、キャッチボールしてる。

最近見ない風景だな。

キャッチボールしてた？

サッカー少年だったんで。

初耳。

言ったじゃん。

憶えてないよ。

……そっすか。

髪、伸びたね。

んー、そう？

クセつ毛だからわかりにくいかも。

髪、下ろした方がいいんじゃない？

んー、そう？

そっちのがスキ。

じゃ、下ろそう。

先月、土曜日の深夜。

キミとケンカした。

どっちが吹っつけたかなんて憶えてないし、何がきっかけだったかも忘れた。

今までで一番でかいケンカだったね。

キミは外に出る時に大きな音でドアを閉めて、ベッドに伏して泣く恋人を振り返りもしなかった。

別れようと思った。

クライだと思った。

事故って死んでしまえと思った。

ホントだよ。

泣いて、泣いて、枕を投げて、泣いて、泣いて。

キミの大切なパソコン、壊してやろうって決心した。

目覚まし時計を右手に、パソコンの前まで行っただ。

あの、写真を貼ったディスプレイを見て。

あの、L判サイズに収まった2つの笑顔を見て。

あの、2人暮らしをスタートした日の写真を見て。

もしもキミが事故ったら。

事故りはしなくても、このまま帰って来なかったら。

そう考えたら、時計を投げ付けられなかったよ。

写真の2人が笑うから。

1人じゃこの部屋は広いから。

キミをウソにしたくないから。

ホントでいてほしいから。

そしたらまた泣けて来た。

泣いて、泣いて、ごめんねって言って、泣いて、泣いて。

後ろから抱きしめてくれた時、いつ帰って来たのかわからなかった。

そんなのどうでもよかった。

ごめん、ってキミが言っ

てごめんね、って言い返して。

もうどこにも行っ

てほしくなくて、キミを押し倒した。

気付けばもう朝で、そんな時間まで求め合う事に慣れてなかった

キミは、照れて、笑って、

「外、歩こうか」



お風呂に入って、湯冷めするといけないからと心配したキミがマフラーを巻いてくれた。

その手が。

めったに見せない気遣いが。

うれしくてうれしくて、すぐに外を歩きたくなった。

1月。午前の風はすっぴんの顔をさらっと撫でて、ボクはキミの手を握った。

キミとならすっぴんでも大丈夫。

でもやっぱり恥ずかしいから、月イチにしよう。

毎月第3日曜日の午前中。

すっぴんで散歩しよう。

キミを大切に思えた朝だから。

スガオでスナオに。

これからもよろしくお願いします。

今日は2月、第3日曜日。

散歩がてら、歯磨き粉とトイレトペーパーを買った。

歯磨き粉は2本。

キミはこれからも、めいっぱい歯磨き粉を使うから。

## スナオ/Monthly/スガオ(後書き)

恋人たちの恒例行事のお話。周りから見ればどうでもいい事でも、  
2人の間では大切だったりするのです。  
ね？(何

## かこのおもいで

わたしには、名前がありません。

だからと言って不便に感じたり、名前がほしいと思った事もあります。

名前など、必要ないのです。

あっても、ない事と同じ。

なくても……

どちらにせよ、わたしたちは忘れられてゆく。

そう。

忘れられて、わたしたちは生まれ変われるのです。

空が蒼い。空気は、やや涼しい。

夏休みもすっかり終わり、9月の中旬。昼休みの屋上は、とても居心地がいい。

校則だらけの学校でも、屋上だけは思う存分に呼吸ができる。

「ケースケ？」

「ん」

呼ばれて、ぼくは自分が眠っていた事に気付いた。

「おはよ」

「……おはよ」

ハルは仰向けで寝転がっているぼくを、仏頂面で見下ろした。

「呼んどいて、一人で昼寝かよ？」

彼はそう文句を零し、乱暴に腰を下ろすとズボンのポケットから

タバコを出す。100円ライターで火を点ければ、おいしそうにハルの目が細まった。

ハルは、ぼくと小学校が一緒だった。中学は別々になってしまったけど、高校でまた一緒になった。

「あつっー」

シャツの第2ボタンだけでなく、第3ボタンまであけながらハルはまたタバコを吸う。

どこか遠い、空の向こうを見ていた目がぼくを睨んだ。

「いつまで寝てんの？ 話があるんじゃないかってっけ？」

いつも通りのイライラ口調が、今日はやたらと安心できた。

「……ケンカしちゃったんだ」

起きたぼくはハルと向かい合ってあぐらをかいた。

始め、ハルはきょとんとした様子だった。ぼくの切り出し方が悪いのかもしれない。けれど、ハルは最小限の言葉だけで、いつもぼくの悩みを汲み取ってくれる。

んー。ハルが眉間を寄せてうなった。

ふと、彼の目の様子がおかしい事に気付く。ぼくを見つめていた視線が、少し左にずれた。

つられて、ぼくも自分の右肩を振り向いた。

「？」

何もない。

「アキ……つつたっけ、カノジヨ？」

「うん、そう」

慌ててハルを見て、頷いた。

「ケンカとか無縁そうに見えたけどな」

「初めてだよ」

「だろうな」

ハルがタバコを口に当てたため、少しの間が空いた。

「もう少し、自分を押し出してもいいんじゃないの？」

主流煙を吐きながらハルが言った。

「ケースケの性格からすると、カノジョの言葉に従うタイプだろう？」  
的確な指摘に、ぼくは頷くしかできなかった。

「向こうの言い分を最優先にして、ケースケはそれに合わせるだけ。  
従順かもしれないけど、おれから見ればただラクしてるだけにしか  
思えねえな」

ぼくはうつむいた。アキに嫌われないように同調してきたぼくは、  
彼女からしてみれば『いい加減な男』にしか映っていなかったのか  
な。

そうやって落ち込むぼくの頭を、突然ハルが叩いた。

「いたっ」

「『優しい』と『好き』とは違うんだぞ？ 『好き』だからこそ出  
せる言動が、今のおまえには足りない」

「……？」

真剣なハルの口調だけど、意味がはつきりとはつかめなかった。

あー。苛立たしそうに、ハルが頭を搔く。

「頭で考えようとすんな。そのうちわかる時が来るだろうし」

ハルは無理やり（少なくとも、ぼくはそう思う）そう結論付けた。  
「ケースケだってカノジョに言いたい事、あるだろ？ この際全部  
ぶちまける。ただ仲直りしたって、このままだとまたケンカするっ  
て、絶対」

「……うん、そうするよ」

素直にぼくは頷いた。

心の中にあつたワダカマリがすつきりした。ハルに相談して、ハ  
ルからアドバイスしてもらっただけで、これまで何度も助けてもらっ  
ている。学校の先生たちの評判は悪いかもしれないけど、ぼくにと  
っては、それはもう頼りになる友人だ。

「やっぱ、ハルに相談してよかった」

「あ？」

「こつという経験、多いじゃん？」

冗談めかして言ったら、ハルは少しだけふてくされた。

「次の授業は？」

「サボる」

「ん、そう。じゃあ、ぼくは教室に戻るから」

そう言つて、屋上から帰るケースケの背を見送つて、おれはごろりと寝転がった。

ふと、ケースケの性格を考えてみる。

温厚ではあるけど、優柔不断。

手先は器用、人間関係が不器用。

そのくせ、世話好きな17歳。

あいつ自身は、そんな性格が嫌だと言っている。

けど、おれは少しうらやましい。おれにはない

何て言うか…

…あたたかいもの、を持っているから。

もう少し、自分に自信を持ってもいいと思う。

はーあ。ため息と一緒に上体を起こした。すっかり短くなったタバコを、地面で引つ搔いて火を消す。

「あんなヤツだけどさ、いいところもあるわけよ。おれにとって数少ない、本音で付き合えるヤツだし」

タバコを屋上の外に放つて、おれは呟いた。視線の先は、さつきまでケースケが座っていたその向こう。

一人の少年が、そこに立っていた。10歳ほどに見える、幼い少年。サイズの大きいTシャツと半ズボンの少年の顔には、ケースケの面影がある。

「ケースケはきつとうまくやれる。だから、安心しな」

少年があどけなく笑った。その体が淡く発光し始める。青の混ざる澄んだ光が、少年の昇華を示す。

「おれんどこに来るのはいつでもいいけど、次はもう少し大人になつて来いよ」

おれは手を振って、光の粒子に砕けたそいつを見送った。

細かい粒はすぐに空気に溶け込んで消える。10秒と待たずに、おれの前からすべては消えていた。

何気なく、空を仰ぐ。

蒼い空は、いつ見たってノンビリしている。思わず引き込まれそうになるぐらい、大きな威厳を持って。

「勉強なんて、馬鹿馬鹿しい」

独り言を呟いて。

おれは大の字に引っくり返った。

今、こうしているのだから

ひと際強く、風が吹いた。葉擦れがざわめいて、黄色い帽子が飛んだ。

くるりと回った帽子は宙で止まったかと思うと、再び風にさらわれて、枝に引っかかった。

葉がざわめいた。

下？

見下ろせば、まだ幼い少女がいた。丸くつぶらな瞳、眉は八の字で、唇を半開きにした少女は呆然と枝に揺れる帽子を見上げている。その瞳が潤み始めた。

葉がこすれた。

うん、そうだね。

ほんのわずかで事足りる。ほんのわずか、枝を揺すればいい。それだけで ほら、帽子は落ちた。

足元に落ちた帽子を拾い上げた少女は、付いた砂を払うとその笑顔に載せた。たたたと走り去る少女を見送る 不意に立ち止まった彼女は、振り返るや元気な声を張り上げた。

「ありがとう！」

どういたしまして。

金属的な雄叫びを上げ金属の刃が身を削る度、激しい痛みが襲い掛かる。

厚い皮膚はとうに切り開かれて、詰まった肉までも裂かれていく。葉が悲鳴に身を揺らす。

切り倒される事は知っていた。1週間前、木登りに励んでいた少



年が足を滑らせ骨折してしまったから。

この木は危険だと、大人たちが話していたから。

ここまで立派に育ったところを切るのは残念だけど。

子供たちの安全の方が優先だと。

身を切られるのは痛い。しかし、少年を助けられなかった時の方が、もっと痛かった。

ガリガリと身を裂かれる音。

少し離れた所で、見守る大人たちがいた。松葉杖をついた少年がいた。黄色い帽子をかぶった少女がいた。

泣いていた。

少女は泣いていた。

泣き叫ぶ少女を、母親が必死に止めていた。今その手を離せば、少女はきつと駆け出す。

金属の刃は、すでに体の半分以上を裂いていた。駆け寄る彼女を潰すわけにはいかない。

近付いたら危ないんだよ。

ぼくの声はきつと届かないだろうけど。

もう少し。もう少しで倒れる。

この痛みはいつまで続くんだろう。早く解放されたい。

……切り倒されたら、どうなるんだろう？

そうだ、松葉杖になりたい。

足が不自由になってしまった人を支えたい。まだ歩けるんだと励ましたい。

右足のギブスが痛々しい少年は、唇をきゅっと結んでいた。きゅっと結んで、見つめていた。

きみが悪いんじゃないよ。

きみのせいで切られているんじゃない。

きみを助けられなかったから。

ごめんね。

ぼくの声は、きつと届かないけど。

刃がさらに食い込む。とうとう体を支えきれなくなったぼくは、横に倒れ

悲鳴。

母親から逃れた少女が駆け出した。一直線に、ぼくに向かって倒れるぼくに向かって

ズンッ！

悲鳴は叫びに変わった。母親は気を失い、大人たちは顔を手で覆った。少女は

少女は。

やはり、泣いていた。

横倒しになったぼくの脇で。ぼくにすがり付いて、わんわん泣いていた。

「ごめんね、ごめんね」

何度も何度も謝り続ける少女に傷ひとつない事を確認して、心から安堵した。よけるのがもう少し遅れていたら、少女まで傷付けるところだった。

「ありがとう、ありがとう」

謝罪は感謝に変わっていた。

不思議な少女だ。まるでぼくをわかっているかのように。

「ありがとう……」

どういたしまして。

がたんっ 体を揺り動かされて、まぶたを開いた。いつの間にか眠っていたらしい。振り返り窓越しに駅名を確認する。

寝過ごしてはいないらしい。

シートの居住まいを正そうとしたら、肩が妙に重い。左肩には女

の頭が乗っていた。彼女はまだ夢の中。

走り出した電車には人気が少なかった。平日の昼過ぎだから、まあこんなもんだ。

制服姿の俺と彼女を見て、咎める人間は誰もいない、平和な昼下がり。と言つても、この平和が始まったのはついさっきからだ。ほんの1時間遡れば、期末試験真つ只中。

試験後の平和かつ自由な時間を、めいっばい噛み締め中。

「……あれ。駅、まだ？」

彼女が起きた。

「あと2つ」

頭の中に路線図を広げて答える。

「中途半端に起きちまった」

何故か悔しそうにうなる彼女。

「寝てりやいいじゃん」

正論を放ったつもりが睨まれた。

「あと5分くらいじゃ、寝るに寝れないでしょ」

まあ、わからないでもない道理ではあるけど      と、納得する事

にした。

「試験終わった日って気持ちいいな」

シートの上で思い切り身を伸ばす彼女。振り上げた拳がコツツと窓に当たった。

「いたっ」

「そんなに痛くねーだろ」

「痛いと言えば」

どんな話題転換だい。

呆れる俺を知ってか知らずか、彼女の唇は話を進める。

「全然痛くないのに『痛い』って言っちゃう時、ない？ 痛くないはずなのに」

「……たとえば？」

ケースが思い付かない。

「カバンが物に当たった時」

「痛くねーじゃん」

「痛くないよ」

彼女はしれっと頷いて。

「でも何故か、『いてっ』とか言っちゃってない？」

……言われてみれば、思い当たる節はあった。

「ほら」

俺の表情から読み取ったらしい、覗き込んだ彼女が頬で笑んだ。

ありがとう

既視感。

彼女に似た幼い笑顔　はて、どこで見たか。

……ああ、ついさっきだ。

夢にしては、あまりに現実味を帯びた夢。

速度を落とした電車が、ホームに滑り込んだ。

「あ」

振り向いた窓越しに駅名を確認した彼女が、やώρα俺の膝を叩き出した。

「カラオケ行こ、カラオケ」

「試験の打ち上げ？」

「そう！」

言うが早い。彼女は立ち上がり、まだ開いてもいないドアに駆け寄った。

よし、久し振りに喉がかれるまで歌おう。

俺が彼女と並ぶのを待つて、ドアが開いた。ホームへ飛び出した彼女に置いてかれないよう小走りで続く。

「おい、走る事ないんじゃないの？」

急ぐ理由なんてない。まさかカラオケが逃げるとも思えないし。

「早く！」

振り向きざまに急ぎ立てた彼女は笑顔で

ありがとう

はつとした。

夢の少女。彼女。

その笑顔は、あまり似ていた。

「ハル？」

発射ベルがけたたましく鳴り響く中でも、彼女の声音は明瞭に聞き取れた。

我に返った俺はかぶりを振って、

「何でもねーよ」

立ち止まった彼女に追いついた。

「すっごい、ぼーっとしてなかった？」

「徹夜で勉強してたから」

何やら訝る彼女にはぐらかす。

「一夜漬けかい」

「追い込まないと勉強する気が起きねーんだよ、俺」

怪訝は払拭できたようで、いつも通りの笑顔に戻った。

2人肩を並べて階段を昇って、自動改札機を通る手前で  
に聞きたくなった。

彼女

「なあ」

「何？」

カバンの中からパスケースを探す横顔に質問を投球。

「カノ、前世って信じる？」

「……は？」

「あからさまにバカにしてんだろ」

「ハルの口から前世って」

見付け出したパスケースで肘を叩かれた。

「珍しい事もあるもんだ」

「だよなー。でもさ」

改札口を抜ける間際に言う。

「俺とカノ、前世で会ってるかも」

「……………」

「パスケース落としてるって」

「珍しいっていうか……」

パスケースを拾い上げた彼女は真顔で、

「……キモい」

傷付くわー。

真顔でキモいって。

傷付くわー。

「何、惚れ直したとか言ってほしいの？」

不気味なものでも見るかのような視線が激痛。

まあ、信じねーよな。

「……何でもない」

「ふてくされんなよー」

駅舎を出た俺の、脇に引付いた彼女は、極めてしれっと言いかけた。

「前世が何でも、今こうしてんだからいいじゃん」

「……」

……そっか。

「……どうした？」

そうだ。

「それ、真理だわ」

「何それ」

「いや、こつちの話」

「何だよそれ」

「今日はめいっぱい歌うぞー！」

「意味わっかんねー」

呆れる彼女を引き連れて、俺は大腿で踏み出した。

自分の余命が短いという事は、たとえ私じゃなくてもわかる事であり、しかしそんな私の気持ちを一体誰と共有できるだろう？

最初は小さな病院で診察してもらった。結果、大きな病院を紹介してもらった事になって再度診察。そして入院、手術。

手術は成功したと言っていた執刀医の笑顔は、どこか悲しげだった。どうやら私の心臓はどんな手術を施したところで、延命処置しか取れないそうだ。注射による薬剤の投与。ベッドの上で送る単調な生活。食事の方は、さすが大学病院、おいしいものばかり届けてくれる。

なのに今の私は、そんな食事を舌で楽しむほどの余裕がない。毎日のように見舞いに来てくれる母親に感謝はするけれど、本音を言ってしまうと、もう放っておいてほしかった。無理に笑ってくれる母親の腫れた目を見るのも、それに笑って応えるのも、もう疲れた。いつそ。

すぐに死ねれば。

何度も繰り返したため息と想像。そうすれば、母も父も楽になれる。むしろ、それを望んでるのかもしれない。弟が一度も私の所に来ないのだって……

家族を責め立てるつもりはない。だけど、私の心に生まれた真つ暗な闇が身勝手なエゴに拍車をかける。親をなじりたくなる。窓辺の花瓶を床に投げ付けたくなる。

日に日に。嫌いな自分は大きくなる。

今は、まだ大丈夫。

だけどこれからずっと、もう一人の私を抑え続けられる自信はない。

そんな事を考えていると、看護婦（と言っちゃいけないか。女看

護士」が検温のために部屋に来た。六人部屋のうち、埋まっている五つのベッドを回り、患者に体温計を渡しながら努めて明るく会話をし、用を済ませたら帰って行く。彼女らとどんな会話をしたか、まったく気にかからない。彼女らにとって、私たち患者はどう映って……

……抑える。彼女らだつて一生懸命接してくれてる。

暴走しそうになる思考を頭を振って追い出す。枕元にある置き時計を見ると、まだ昼までに時間がある。落ち着かせる意味でも、空気を入れ替えよう。気分転換に、私は中庭へ出る事にした。

入院生活に必要なものは大方手に入る売店の前を通り抜け、窮屈そうなガラス張りの喫煙スペースを横目にしながら、病棟のロビーを出る。

外はいい天気だった。抜けるように、どこまでも澄んだ空には雲はなく、空気は暖かく優しかった。目の前には緑が、風に押され揺らいでいた。

病棟前に広がる中庭には、ベンチの並んだ広場がある。そこはまるで別世界で、時間の流れがそこだけ違う。そよ風に揺れる葉擦れがカーテンになって、空間を閉じ込めているかのよう。

そしてそのせいか、1人ベンチに座っている彼がまるで絵のよう。そう。まるで絵の中に迷い込んでしまったかのような錯覚を覚えたのだ。

「何ですか？」

15、6歳くらいの彼は立ちすくんだ私に、たった一言だけを投じた。現実に戻された私は何のつもりもなく、彼の手元を指した。

「ケータイがどうかしました？」

「違う。右手の方」

彼は苦虫を噛み潰し、メールを打っていた左手を下ろす。右手にはまだ火を点けたばかりのタバコが煙を揺らせていた。

「別に咎めようとしてるんじゃないの」



そっぽを向いた彼をなだめる。

「ただ、どうか病気ならと思って」

ロングスリーブシャツとスウェットパンツという楽そうな服装から、彼が入院患者だと推測した。

「盲腸です、ただの。タバコとは関係ありません」

ぶつきらばうに答え、彼はケータイを握ったまま左手中指で頭を搔いた。何度も繰り返したセリフなのか、まるで棒読みに聞こえる。「一週間も入院ですよ？　タバコだって吸いたくなる」

そういうものなのか考えてみたが、27年間ずっと無喫煙だった私にはさっぱり。

「誰かの見舞いですか？」

視線が返って来た。

「まさか」

苦笑する。上下にスウェットを着て、まともなメイクもしていないというのに。

「ここ」

彼が、ベンチに空いた隣のスペースをケータイの頭で小突く。

「座りませんか？　話し相手がいなくて退屈なんです」

「年上の女をナンパ？」

「まさか」

と私の口真似をした後、さらりと彼は言う。

「余命幾ばくもなく、生きる事を放棄しかけてる」

驚いて、私は言葉を失くした。表情が失せ、頬の筋肉が強張るのがわかる。横目で胸の中を見透かされた？

「……会った事ある？」

真っ白の頭から零れた問い。つまらなそうに、彼はタバコを吸った。

「まったくの初対面です」

その口から吐かれた煙がそよ風に舞う。

「じゃ、どうして？」

「説明するの、面倒くさいし苦手なんです。わかる、という事だけわかってください」

「エスパー？」

言ってから、我ながら稚拙な言葉だと思った。彼も同じ感想を抱いたのか、鼻先で笑う。

「ただの盲腸風情が、とか思つかもしれませんが　余命を知つて、どんな気分ですか？」

彼の超能力（？）について聞きたかったけど、たった一つの質問ですべてが白けて見える。

私は空を見上げ、ツバメを2羽数えてから彼の顔を見た。相変わらず、つまらなそうにタバコを吸っている。

「全部、真っ白になっちゃったみたい」

答えは自然と口から出た。

「何もする気が起こらないのよ。だから、こうしてあなたと話をしてる」

「ふうん」

鼻を鳴らして、彼はおもむろに言った。

「それじゃ、かわいそうだ」

「……………ん？」

天気の話でもしてるような口振りを何度か頭の上で繰り返したが、理解できずに終わる。

「私の事？」

「高校生の頃の夢って憶えてますか？」

私の語尾に彼は語を重ねた。

「夢って？」

ふう　吐いた煙はため息に思えた。

「あなた自身が描いていた夢です」

「もう忘れたわ」

「じゃ、思い出してあげてください」

足元に落としたタバコを踏みつけて、彼は立ち上がった。

「あなたの未来は、あなたの過去の延長なんですよ。今のあなたはその間にいる。過去を未来につなげるのが役目なんじゃないかと思うんです」

そよ風が少し強く吹いて、木々が騒ぐ。別れの言葉もなしに立ち去ろうとする彼に、私は質問した。

「残りの時間で間に合うかしら？」

4歩で立ち止まった彼は振り返ると、事も無げに言ってくれた。

「がんばればいいだけです。時間は、まだある」

元気付けているのか突き放しているのか、その口調からはわからなかったけど、その時に初めて彼の笑顔を見た。

「もし見つけたら、拾ってあげますよ」

「そうしてやって。きっと迷子になってるだろうから」

……これが、自著の創作に取り掛かったきっかけ。

私にとって、それは不思議な体験だった。

けれど彼との出会いはとても大きく、私に力を与えてくれたのは疑うまでもない。

盲腸風情の彼とはこれっきり、二度と会う事はなかった。せめてもう一度会いたかったんだけど。

生きる勇気ではなく、  
時間を活かす契機をくれた彼に。  
この本を捧げます。

『まえがき』と題されたページを読み終えて、俺は本を閉じた。ハードカバーで刊行されたその本を改めて見つめる。表紙の上に『我<sup>が</sup>楽多<sup>らくた</sup>』というタイトルが不器用な字体で並ぶ。カバー絵は表紙から裏表紙に渡って一枚の絵になっていて、それぞれに髪の長い女と、制服姿の少年が描かれていた。ちょうど背表紙にまたがって、やわらかく照る太陽と澄んだ川が上下に並び、二人はそれを挟んで向かい合っている。

タイトルの右下に、身を強張らせて緊張しているかのように、著者名が遠慮がちに記されていた。

<sup>あいざわ</sup>  
相澤ちえ。

初めて俺は、その女の名を知った。

……きつと迷子になってるだろうから……

あれは、今となつては謙遜にしか聞こえない。書店の会計カウンターの前に堂々と『相澤ちえコーナー』を構え、平積みされた本を手取る人がたくさんいる。こうして立ち読みしていた間にも、俺の脇から本を取り、買っていく人を何人見た事か。

刊行され、メディアに紹介されるのを待つ事なく口コミだけで高売上げを達成した、無名の作家。彼女はそれでもなお、迷子と言うだろうか。

「お、珍しい。ハルが活字を手にしてる」

やおら俺の左腕に寄りかかり、カノが手元を覗き込んだ。

「相澤ちえかあ。これ、かなり有名だよ。詩とか写真とか日記みたいなもので、とにかく相澤ちえの粹を結集した、みたいな本でしょ？　ちよつと読んだ事あるけど、面白いよ」

へえ　世の流行というものにまったく言っていないほど疎い俺は、今さらながらに驚いた。

よもや、盲腸の時にそんな才能に出会うとは。

「今度、映画にもなるらしいよ？　どんなのになるかまでは知らないけど」

「ふうん」

「あれ？　興味あるんじゃないの？」

「ないわけじゃあない」

「どっちよ？」

「どっちも」

なおも食い下がろうとするカノをかわして、俺は『我楽多』片手に会計カウンターに向かった。

会計を済ませ、書店名入りのカバーをかけられた本をカバンに押し込みながらコーナーに戻ると、カノが『我楽多』に読みふけていた。

「帰るぞ」

その後ろ頭を小突くと、

「何だか、かわいそうだなあ」

何やらぼやき始めた。

「だってさ、こんな才能持ってて、短い人生を過ごしたんだよ？　もつと生きていれば、きつとすごい作家になったかもしれないのに」  
相澤ちえの運命を惜しんでいるのか、そんな短い命を与えた神への文句か、俺には判断しかねた。

「でもきつと、彼女は満足できたんじゃないの？」

「私だったら不満だらけだけど」

おまえじゃ、な　喉元まで競り上がった言葉を、危ういところで押し止める。何を言い返されるか知れない。

「ハルが読み終えたら見して。一冊限りの才能ってのを見たいし」  
手にしていた本をコーナーに戻し、カノは振り向いた。

「ん」

二人並んで書店を出ようと出入り口の自動ドアを抜けて

ありがとう

俺は振り返った。

相澤ちえコーナーに山積みされた本たち。その前に。色素の薄い髪を肩まで伸ばした、細身の女が立っていた。スウェットを着た、まともにメイクもしていない女。

彼女ははにかむように微笑んで俺を見ている。

ふいに立ち止まった俺の脇で、カノが何事かと俺を見た。滑らかに自動ドアが閉じる

何かを言いたかった。礼なんか言われるような事は何もしていないし、本が出来たのは彼女に才能があったからで、俺が買ったのはそれが形になったから。なのに、ありがとう、だなんて。

「……………」

自動ドアのガラス越しからでは、彼女の姿は見えなくなった。閉じるに連れ、彼女が消えてゆく。

「……あの時、１７だったんだよ」

呟いて、微笑を見届けた

「……は？」

見れば、カノがあんぐりと口を開けている。

「あん時ってどん時？」

訝りながら、閉じきったドア越しに店内を覗き込む。

「やめる。バカに見られる」

「ねー。どん時？　んで、誰に話してたの？」

「独り言」

そう。独り言。

「ねー、ねー」

「帰るぞ」

うるさく鳴くカノの手を強引に引っ張った。

俺は、幽霊なんて存在を信じていない。

それはきつと、そこに取り残された『過去』が形になったものだと思うんだ。

じゃあ、書店の彼女はなんだったんだろう？

もしかしたら、あそこに平積みされていた『本』たちに込められた、相澤ちえ自身だったのかもしれない。

『過去』というものはどこにだって残る。時間の流れから置き去りにされた、人が創り出す、止まった瞬間。

もうこの世から去ってしまった相澤ちえは、本を書く事で彼女の『過去』を残す事ができた。

俺は

俺は。俺の周りで流れ続けるこの時間に、自分の『過去』を乗せる事ができるんだろうか？

こんな事を言うと、また力ノに笑われるから黙っておくけど。

俺は、とてもとても、ちっぴけな人間なんだと思うんだよ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1129d/>

---

御華詩Garden

2010年10月8日15時17分発行